

中央環境審議会瀬戸内海部会企画専門委員会現地ヒアリング(東部) 2012年2月23日

大型海洋動物からみた 瀬戸内海と今後

神戸市立須磨海浜水族園

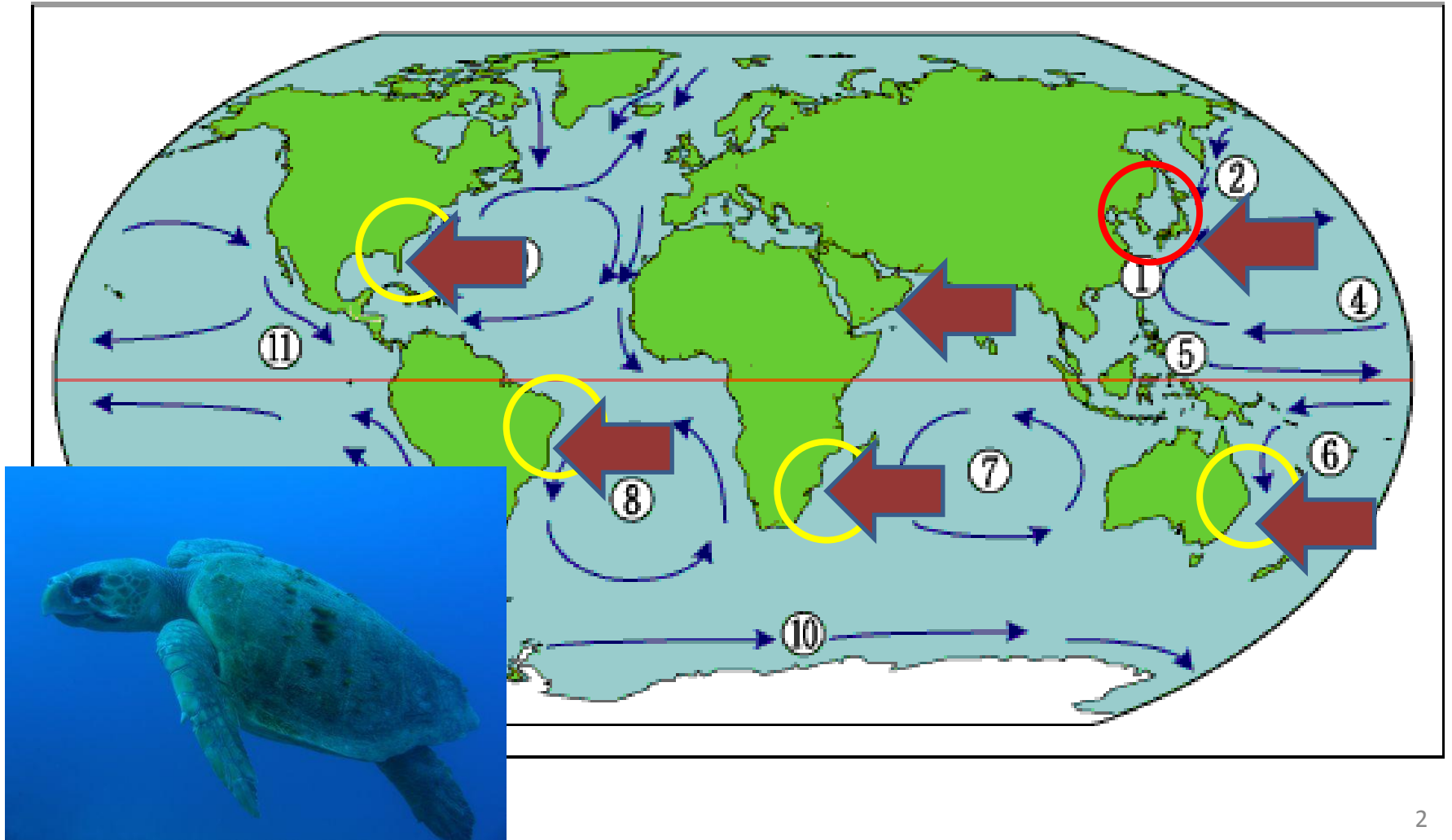
園長 亀崎直樹

NPO法人 日本ウミガメ協議会会長

東京大学大学院農学生命科学研究科客員準教授

日本は暖流にさらされる位置にある。
地球には同様な海域がいくつかある。
その環境に生きる動物がいる。

例えばアカウミガメの産卵地。



同じく暖流にさらされる日本とフロリダには
内海が存在する。

日本の瀬戸内海 フロリダのIndian River Lagoon

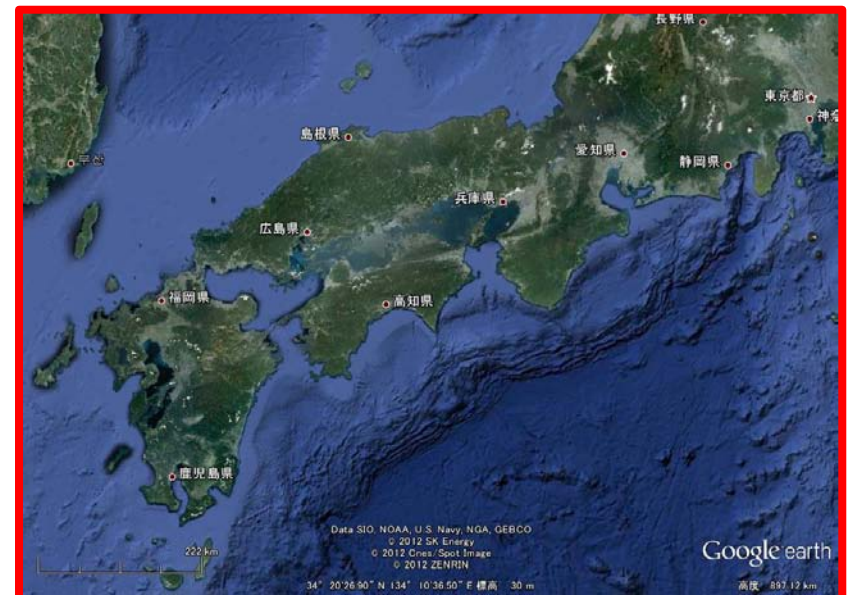
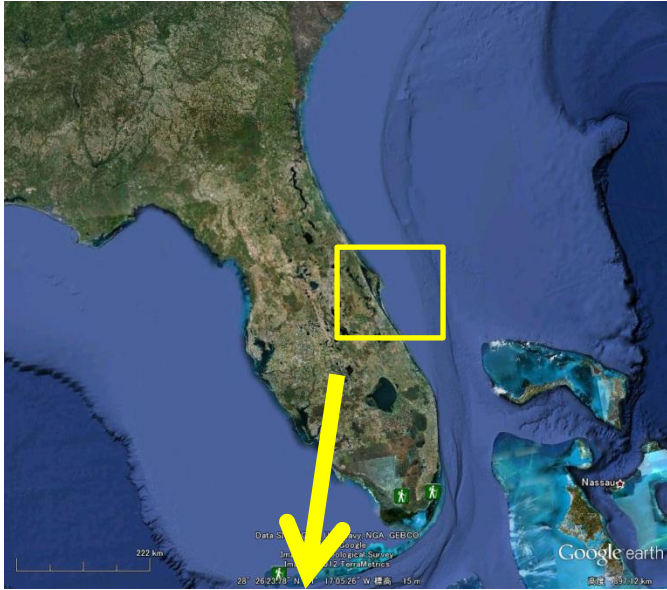
内海は浅海で生物量(基礎生産)が豊富

大型回遊性動物にとっても「ゆりかご」的の海域

フロリダのIndian River Lagoonには

バンドウイルカ・アメリカマナティ・アカウミガメ

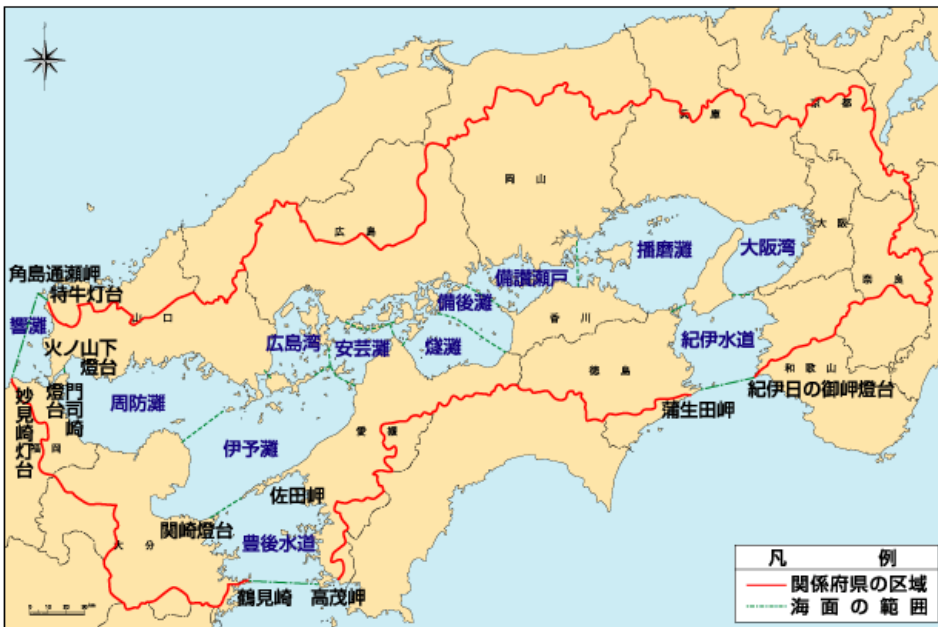
アオウミガメ・たまにはザトウクジラも入ってくる



瀬戸内海も浅海で豊穡の海である。
小型クジラのスナメリ・アカウミガメ・
アオウミガメが生息している。

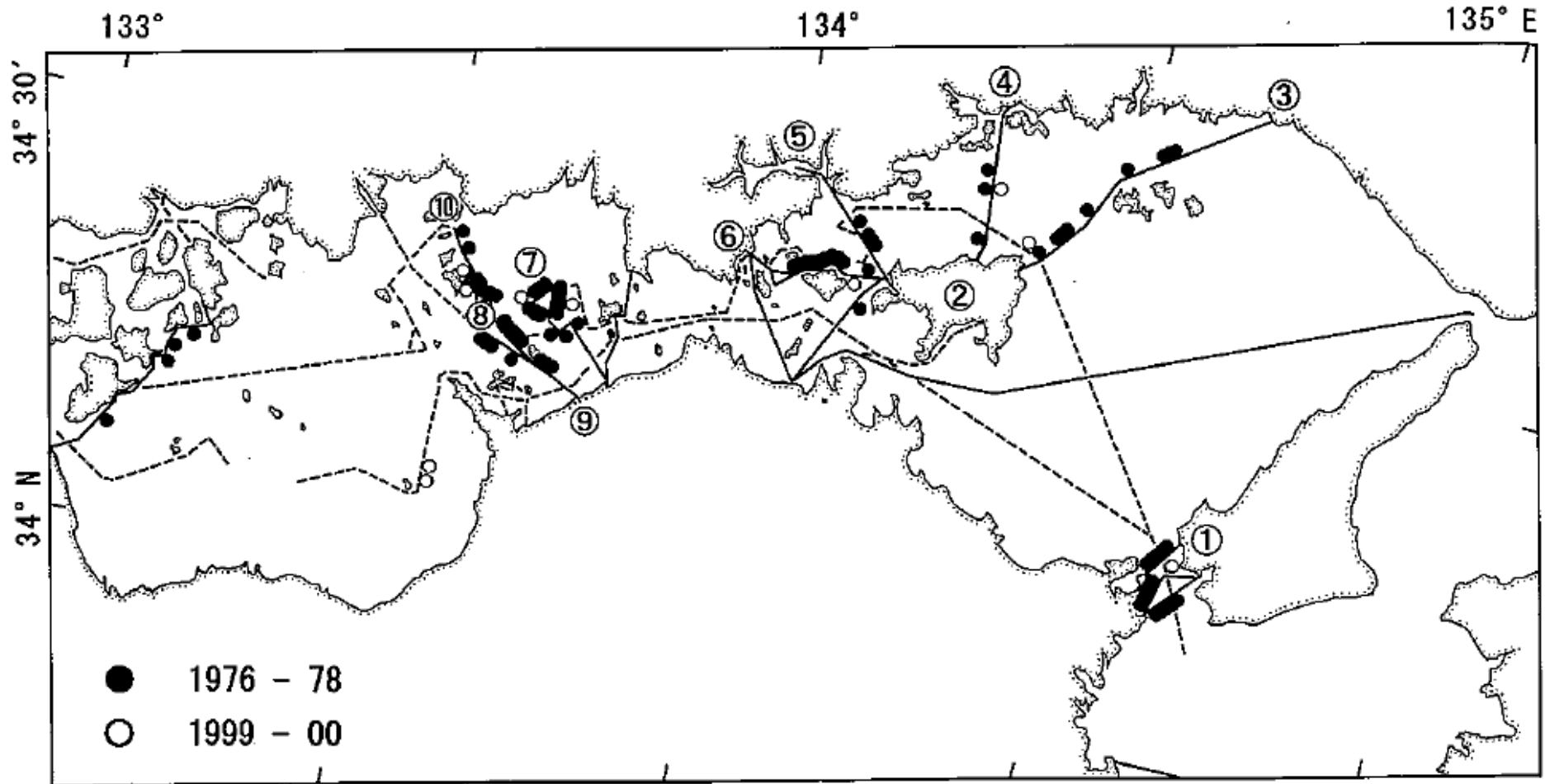
動物食のアカウミガメ、植物食
のアオウミガメにとって、極めて
重要な海域である。

右上からスナメリ(希少種水産庁)、アカウミガメ(絶
滅危惧 I B類)、アオウミガメ(同 II 類)



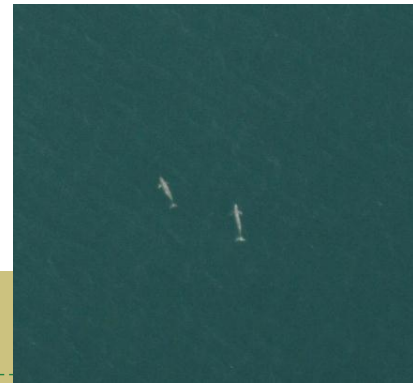
スナメリのモニタリング調査は少ない

Kasuya et al. (2002)は1976-78年と1999-00年に飛行機を使った調査を実施し、瀬戸内海のスナメリが激減していることを示した。



須磨水族園でも近海のスナメリの調査を実施した。

2010年11月、下図の経路で飛行機を飛ばし、スナメリを捜したところ6群21個体が発見された。2011年も同様な調査を行ったが、全く発見できなかった。



航空機による調査以外の情報収集

- 1 瀬戸内海にはスナメリは生息している。
- 2 その数は西の方が多いが、大阪湾や播磨灘でも、まだ、細々とであるが生息している。
- 3 数は急速に減っている。

目撃情報の収集 (2010年6月より)
定期船航路、海上保安庁の船舶、
県の調査船から情報を収集

	件数	頭数
大阪湾	20	77
播磨灘	148	316
牛窓	171	446
合計	339	839

漂着死体に関する情報収集

2010年度 4件
2011年度 6件

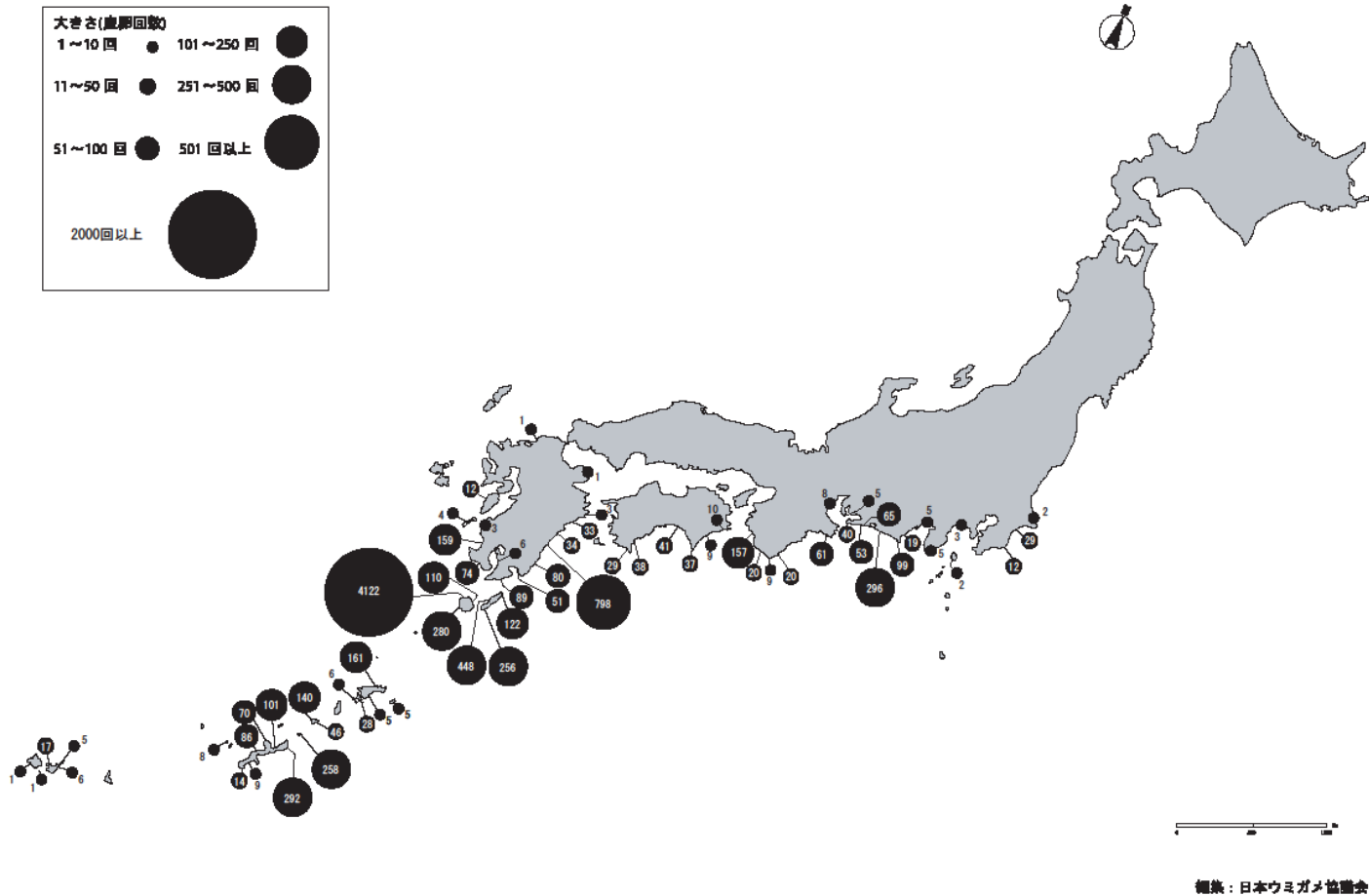


胃内容物

アカウミガメは南九州を中心に産卵する。
 2011年は8986回の産卵、18069回の上陸が確認された。
 その内、瀬戸内海に面した海岸は、3カ所で14回の産卵。
 アカウミガメは瀬戸内海を避けている。

アカウミガメの産卵分布図（2011年）

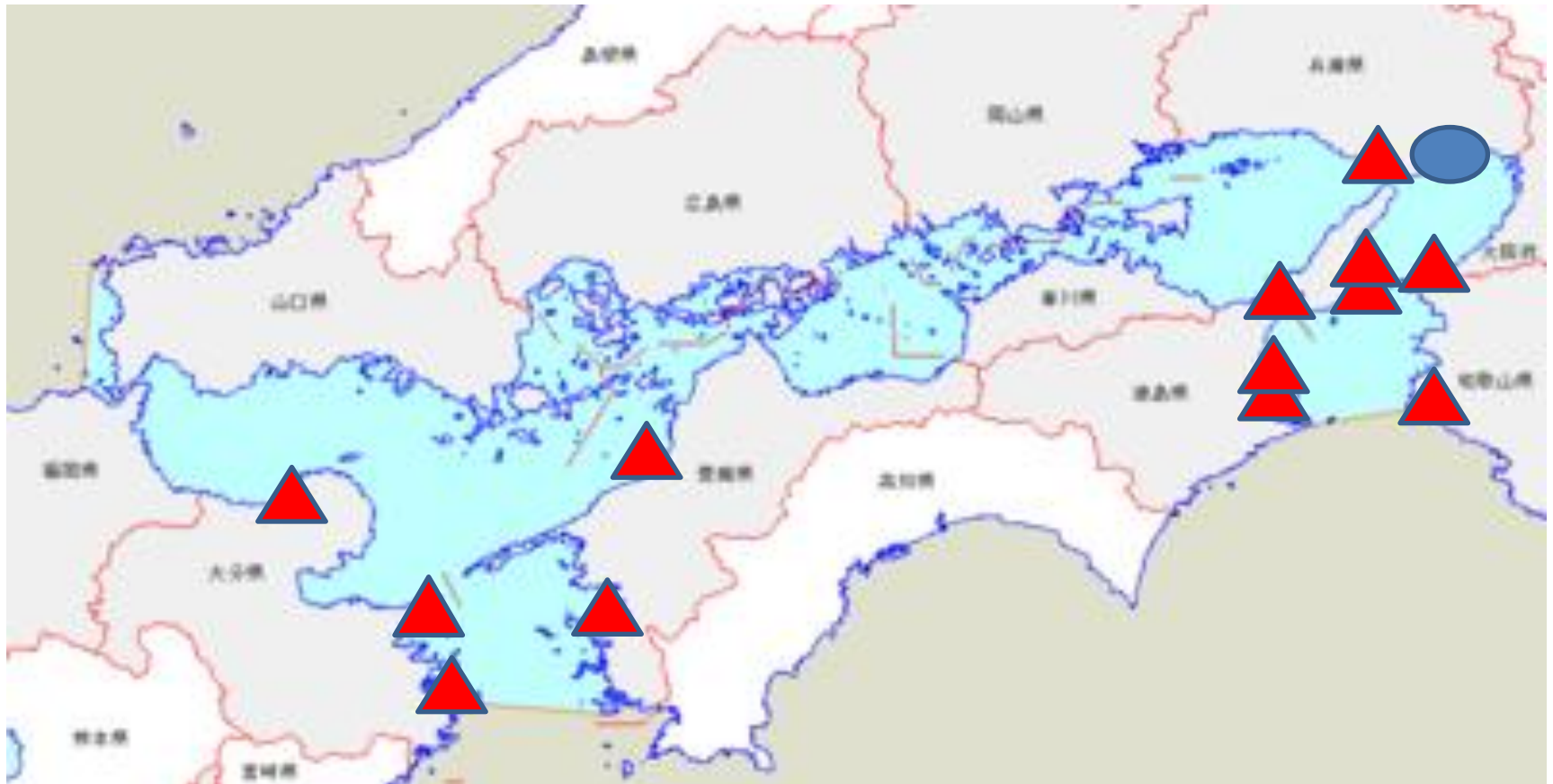
Nesting of Loggerhead Turtles in 2011



過去22年に記録されたアカウミガメの産卵海岸

アカウミガメは本来瀬戸内海で産卵しないのか、あるいは産卵できなくなったのか？

しかし、西村(1967)によると、神戸舞子-須磨海岸、大阪高石浜、別府湾はかつて産卵地であった。それらの砂浜は現在ほとんど存在しない。



瀬戸内海で発見されるウミガメ

瀬戸内海では発見されるウミガメの多くは死んだ状態で発見される。原因は漁業の混獲と考えられる。解剖の結果、ゴミの誤飲ではない。

アオウミガメ

県	生	死
徳島	1	4
大阪	0	3
兵庫	1	3
香川	0	2
岡山	0	1
広島	0	0
山口	0	3
愛媛	0	0
大分	22	3
合計	24	19

アカウミガメ

県	生	死
徳島	8	14
大阪	6	12
兵庫	14	18
香川	2	7
岡山	0	0
広島	0	0
山口	1	9
愛媛	0	0
大分	11	6
合計	42	67



まとめ

- 1 内海は中型の海洋動物にとって重要な生息環境である。
- 2 瀬戸内海もかつてはもっとイルカやウミガメのいた海だった可能性が高い。
- 3 現在でも、スナメリ、アカウミガメ、アオウミガメが生息している。
- 4 スナメリの数は急速に減少し、アカウミガメの産卵する海岸の多くも消失した。
- 5 瀬戸内海で発見されるアカウミガメ、アオウミガメは大分県を除くと、死亡している方が多い。多くの原因は漁業の混獲と考えるのが妥当。

今後の瀬戸内海管理の方向性(私案1)

- 1 食料資源および漁業生産を最大限にする政策が重要
 - 1-1 漁業の管理(漁期、漁獲量、漁業海域、漁具、漁船数の制限)
 - 1-2 適当な栄養塩の付加の検討(下水、排水規制の再検討)
 - 1-3 海域の垂直対流の維持(堤防、港湾、河川改修などの人工物計画の再検討)

今後の瀬戸内海管理の方向性(私案2)

2 将来、日本人が誇れる海域の構築。

2-1 景観の保全

2-2 生物多様性の保全

中型海洋生物の生活できる海の復元

生態系の変化、生物の進化を妨げない体制の構築

2-3 海洋利用の多様性の復元

自己責任型利用の復元

2-4 心ある人材によるモニタリング体制の支援

すぐ着手すべきこと(理想)

- 1 瀬戸内海管理センターを設立する。
- 2 水産学、海洋工学、海洋学、海洋生物学、水産経済学、海洋法に明るい、かつ若い人間を配置する。
- 3 それぞれの分野の担当に、現段階の問題点、将来の方向性について分析をさせる。

以上